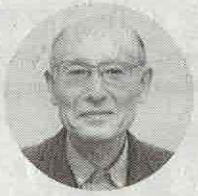
日本農民新聞　2017年12月5日

蔦谷栄一の異見私見

川崎平右衛門を広く世に知らしめたい



この11月23日、東京都府中市にある郷土の森博物館で、第1回川崎平右衛門研究会が開催された。川崎平右衛門は武蔵野国多摩郡押立村（現府中市押立）の出身であり、本年5月、川崎平右衛門顕彰会・研究会の設立総会が開かれたが、これを受けて具体的活動の第一弾となる研究会が、平右衛門の銅像がある郷土の森博物館で開かれたものである。

川崎平右衛門（1694－1767年）は、徳川幕府の再興を担った第8代将軍徳川吉宗が取り組んだ享保の改革の柱の一つである武蔵野新田の開発を成功に導いた人である。大岡越前守忠相を責任者とする武蔵野新田開発は難航を極めたことから、現場を知る者でなければ成功は難しいとの判断から、押立村の名主であった川崎平右衛門に白羽の矢が立てられ、武蔵野新田世話役として開発の現場を任されたものである。

東京の多摩から埼玉県にわたる武蔵野台地に82の新田の開拓を成功させることによって、当時世界最大の都市といわれた江戸の食料事情の改善は勿論のこと、財政の再建に大きな貢献を果たした。

もともと作物の栽培には適さない武蔵野台地を改良していくには、大量の肥料が必要であったが、百姓たちは貧しく肥料を購入することはかなわず、幕府も財政難で肥料代を補助することは困難であった。平右衛門は、農閑期には肥料が半値にまで下落することに目をつけ、この時を見計らって大量に肥料を買い付ける。一方で収穫物は商人の手に任せず、直接買い上げてやることによって有利販売する。このようにして肥料は半値で貸し渡し、収穫物は2割高で買い取り、貸し付けた肥料代は収穫物で返済させる。このための資金は、幕府から公金を借り入れ、これを商人たちに貸し出すことによって、元金には実質手を付けず、商人たちから得た利息をこれに充当する、ことを考案し実現した。このために、見ず知らずの人間が集まって作られた村であるからこそ、村人たちが助け合い、百姓たちの話し合いによって自主的に物事を判断して進めることができるよう、百姓自身が協力し合う百姓組合ともいうべき取組みを重視した。その他の手法も含めて、平右衛門は助け合う心、協同の精神を尊重し、百姓たちの力を引き出すことによって、新田開発を成し遂げたのであった。

平右衛門はその後、本田代官となって輪中で知られる美濃三川の治水工事にあたり、さらに大森代官となって石見銀山の再建に当たっている。いずれの地にも平右衛門の功績とその人徳をたたえて、いくつもの石碑等が立てられている。

平右衛門が活躍したのは日本における協同運動の祖とされる二宮尊徳や大原幽学よりもさらに100年も前のことである。二宮尊徳等は広く知られているのに対して、川崎平右衛門を知る人は少ない。この平右衛門をもっと知ってもらいたい。わが国の協同運動の歴史をさらに遡ることが、これからの協同運動を進めていく大きな力になる。これが川崎平右衛門顕彰会・研究会設立のねらいでもある。筆者はこの事務局長を預かっている。多くの方の入会を期待したい。本会についての問合せ、入会申込みは080－5895－3960まで。

（農的社会デザイン研究所代表）